

四国大学 第3回 富士正晴 全国高校生文学賞

応募用紙

※太枠内に必要事項をご記入ください。

ふりがな			
部誌名	発行No.	第	号
	発行年月日	年	月 日
ふりがな			
学校名			
学校の郵便番号住所	〒		
ふりがな	学校or顧問のTEL・FAX		
担当顧問氏名	担当顧問のMailアドレス		

四国大学 第3回 富士正晴 全国高校生文学賞

未来を描く才能の、その先へ



キリトリ線

四国大学 第3回 富士正晴 全国高校生文学賞

応募用紙

※太枠内に必要事項をご記入ください。

ふりがな			
執筆者氏名			
ふりがな			
学校名			
学校の郵便番号住所	〒		
ふりがな	学校のTEL・FAX		
担任教員氏名	学校のMailアドレス		

人が集まる「人」をつくる、大学。



四国大学 第3回 富士正晴 全国高校生文学賞

趣旨

県歌を作詞したことで知られる徳島出身の作家富士正晴を顕彰し、同時に新たな文化の担い手となる若者の文学的才能の開花を促すために、富士正晴の名を冠した本賞を設けました。

富士正晴は、戦後島尾敏雄らと同人誌『VIKING』を創刊し、文芸の復興に力を注ぎました。高校生を始めとする多くの若者が、文芸を通じて豊かな情操を育まれることを切に願っています。

四国大学 学長 松重和美



対象

高等学校在学学生

文芸部誌に掲載された個人の小説作品。もしくは個人の小説作品を応募することも可能です。
(A4用紙に縦書きで印字するか、市販の原稿用紙で応募してください。)

応募規定

2021年10月1日以降に発行された文芸部の部誌を1校につき1冊お送りください。応募いただいた文芸部誌は返却できません。他の文芸賞に応募した文芸部誌でも本賞に応募可能です。

裏表紙の応募用紙に必要事項を記入してください。

◎ 文芸部誌での応募

文芸部誌の表紙の裏に糊で貼り付けて送付してください。

◎ 個人での応募

原稿の一番上に応募用紙を綴じて送付してください。個人での応募の場合は、作品ごとに担任の先生に署名いただいた応募用紙を添付してください。応募作品は複数でも構いません。複数の場合、応募用紙をコピーしてご使用ください。

パンフレット
データ版はこちら



賞



◎ 大賞、優秀賞、奨励賞の受賞者には、**四国大学分野別入試(文芸部門)A区分の受験資格**が与えられます。本入試を受けて四国大学に入学されますと、**毎年80万円の特別奨学金(返還義務無し)が4年間給付**されます。

◎ 佳作の受賞者には、**四国大学分野別入試(文芸部門)B区分の受験資格**が与えられます。本入試を受けて四国大学に入学されますと、**毎年40万円の特別奨学金(返還義務無し)が4年間給付**されます。

◎ 大賞については、受賞者の言葉と受賞作品を徳島文学協会発行の文芸雑誌『徳島文学』に掲載します。

募集期間

2022年7月12日～10月10日

(当日の消印有効)

審査

文芸部誌の小説作品および個人の応募作を対象として審査し、最終選考に残った作品について四国大学にて各賞を決定します。

最終審査員

阿部 曜子(四国大学文学部長)

佐々木 義登(四国大学文学部 日本文学科教授)

館 健一(四国大学文学部 日本文学科講師)

審査結果

2023年1月に受賞者へ通知します。



送付先

〒771-1192

徳島県徳島市応神町古川

四国大学文学部 日本文学科「富士正晴 全国高校生文学賞」係

応募に関するお問い合わせ

日本文学科 佐々木 義登 e-mail y-sasaki@shikoku-u.ac.jp

主催

四国大学

入試に関するお問い合わせ

四国大学入試課

TEL.088-665-9908

協賛

徳島文学協会

<https://www.t-bungaku.com>

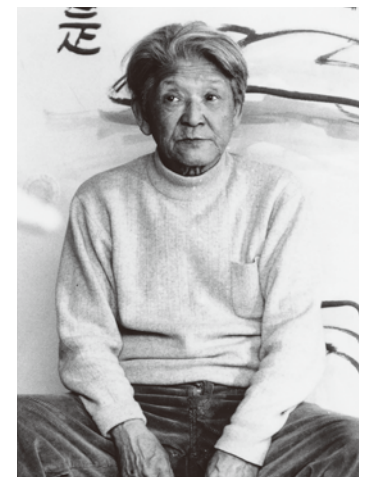
作家 富士 正晴とは

富士正晴は大正2年10月に徳島県三好郡山城谷村に生まれました。大正6年には一家で朝鮮半島に移住、大正10年、8歳の時に帰国し神戸に住みました。17歳で京都第三高等学校(現・京都大学)理科に進学しますが文学に目覚め、昭和7年には野間宏らと同人雑誌『三人』を創刊します。

昭和19年に召集令状を受け中国大陸を転戦し、昭和21年5月に復員しました。その後昭和22年10月に島尾敏雄らと同人雑誌『VIKING』を創刊、高橋和巳、庄野潤三、津本陽、久坂洋子らが同人として参加しました。

昭和26年に「敗走」、昭和29年に「競輪」、昭和40年に「徴用老人列伝」で芥川賞候補、昭和39年には『帝国軍隊に於ける学習・序』で直木賞候補に、昭和43年には『桂春団治』で毎日出版文化賞を受賞します。『たんぽぽの歌』は「豪姫」と改題され勅使河原宏監督により映画化もされました。

昭和26年以降、昭和62年に亡くなるまで大阪茨木市の竹林に囲まれた家屋に暮らし、「竹林の隠者」とも呼ばれました。詩人としても活躍、一方で彩墨画や木版画なども制作し多彩な才能を発揮した芸術家でもありました。



撮影/藤本巧 提供/徳島県立文学書道館